新・山と花のたより 291号

２０２５年１月１５日　　松尾　忠
メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
HPhttp://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com/

天理・桃尾の滝から大国見山(500m)に

1月10日大国見山に登ろうと思い立った。

大和盆地の周囲を取り巻く山々の連なりは、昔から“青垣”と呼ばれてきたが、私の住居は西の青垣の山麓に近く、一方大国見山は東の青垣の北寄りの秀峰。

当初、登山口までバイクを走らせるつもりだったが、当日の朝の冷え込みで、急遽電車で天理駅に向かうことにした。

西の青垣は冠雪で真っ白

近鉄電車からは西の青垣が見渡せた。大和葛城山(958m)、岩橋山(659m)などのピークは冠雪で真っ白、しかもその雪化粧は中腹にまで及んでいる。「アイゼンが必要になるかな」とザックのポケットを探ったが、簡便なチェーンアイゼンすら入っていない。自らの迂闊さに舌打ちする思いだが、「無理だったら引き返す」事としよう。

↑桃尾の滝

つららをともなった２３ｍの滝

登山口の桃尾の滝に9時20分到着。東の青垣では最大級の滝とのこと。23mの高さから落下する流れはこの日細かったが、何本かの長いつららを従えており、飛び散った飛沫が氷のベールやすだれとなって滝壺の巨岩を飾っている。

古くからの修験道の行場らしく、大きな摩崖仏、幾つかのお堂、建物などが静まり返って佇んでいた。

古い寺院跡や新しい宗教施設

９時４５分登山開始。コンクリート舗装の急坂をジグザグに登り、石仏などを眺めながら進むと、大親寺(跡地)に着く。この寺は平城京遷都が行われた和銅年間(西暦 708～715)に建てられた古刹だったが、明治維新の「廃仏毀釈」によって徹底的に破壊されたという(奈良名山案内)。大きくて、立派な石垣は往時の名残だろうか。

一方、まだ新しい民家風建物もあり、「日本山妙法寺」の看板があった。

路傍には何カ所かで茶の木が植わっている。かつて、お寺で植えられたものだろう。

樹林の中の尾根道を進む

道標に従って山頂を目指すが、途中で道がわからなくなった。その時、高齢者を含む男女の集団が追い付いてきて、そのリーダーがスマホのGPSを使って進むべきルートを教えてくれた。名古屋から車で来たのだそうだ。私もGPSを学ばなければならない。

↓イズセンリョウ

樹林のなかの尾根道には所々イズセンリョウが白い実をつけていた。

ロープを手繰って急登をのぼり、岩々のある山頂へ

道はやがて急登になった。ほぼ切れ目なくロープが張ってあり、そのロープを手繰りながら、ゆっくりと登り、11時10分大国見山山頂着。

大きな岩々の間に小さな祠がある。落ち葉の降り積もった地面も岩も祠もうっすらと雪に覆われているが、アイゼンを必要とするほどではない。

眼下に広がる大和盆地

↓山頂からの眺望。盆地の向こうに矢田丘陵や生駒山系が見える

雑木林の中の頂上だが、西側だけは開けており、そこから大和盆地の北半分とそれを取り囲む青垣が見渡せた。

樹木がなければ、

山名にふさわしい大展望が得られるのだろう。

昼食後、往路をたどって下る

昼食後、往路をたどって桃尾の滝に下った。下りで何回か滑って転倒したり、尻もちをついた。落ち葉に覆われた滑りやすい急傾斜の路とは言え、筋力の衰えによることは明らか。

筋力・体力強化のトレーニングに努めなければならない。

←山中にあった立派な「六地蔵」

国見とは

国見山と呼ばれる山は全国各地にある。手元の「奈良名山案内」の本にも県内で４つの山があげられているし、さらに載っていない国見山もたくさんある。

では**「国見」とは何なのか**。デジタル大辞泉をひくと「天皇や地方の長(おさ)が高いところに登って,国の地勢、景色や人民の生活を望み見ること。---もとは春の農耕儀礼。農事を始めるにあたり、農耕に適した土地を探し、秋の豊穣を予祝したもの。」とある。

なるほど、この山はそうした儀礼・式典を行うには最適の場所に違いない。山頂にあった祠は小さいながらも、古代からの人々の願いを受け止めてきたのだろう。

のろし台の痕跡も

頂上にある複数の自然石に丸い半球型の窪みが穿たれており、始め「手水鉢」かと思ったが、案内本にあった烽火台の油入れだったようだ。白村江の戦い(663 年朝鮮半島の白村江で日本、百済連合軍が唐・新羅連合軍に敗れた)後、外敵に備えて西日本各地にのろし台が設けられた。王寺町の明神山の烽火は難波と飛鳥京とを結ぶものとして知られているが、此処での烽火はどこへ急報を届けたのだろうか。

廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)

明治元年、政府は「神仏分離令」を発し、古くから続いてきた神仏習合を否定した。これにより全国各地で寺院や仏像・仏具等を破壊・除去する廃仏毀釈の動きが起こった。興福寺、東大寺をはじめ歴史のある奈良の寺院が、破却・荒廃の憂き目にあった。一時は興福寺の五重塔が売りに出され、多くのお寺から僧侶がいなくなる事態も生まれた。十津川村では寺が全廃され、最近まで「寺の無い」状態が続いた。

この廃仏毀釈で多くの寺院がなくなり、貴重な建物、仏像・仏具、書画などの文化財が損壊、焼却、散逸し、一部は海外に流出するなど、取り返しのつかない大損害を被った。

天皇制国家の確立とその威信高揚を図ったとはいえ、時の政府による暴政・愚策であった。

私は、無宗教・無神論者だが、多くの人々が大切にしてきた宗教の施設や思想・文化は大切にしなければならないと思っている。また長い間、宗教者の友人・知人らと平和運動などを共に進めてきた、

政治権力が宗教に介入し、それを利用しようとする動きは百害あって一利なく、「政教(政治と宗教)分離」は人類歴史が勝ち取ってきた近代民主主義の大原則だと思う。

続・続・二上山に咲く花々４９

写真は故澤木仁さん

ミヤマウズラ(深山鶉)　　**ラン科シュスラン属**

廃道になって荒れた道を歩いていて、崖の下の日当たりのいい緩斜面で出会いました。翌日澤木さん(故人)と再訪し、撮影すると共にあたりを探すと数株の花を見つけました。

以後毎年の出会いを楽しみにしていましたが、その後道が閉鎖され、一層荒れてしばらく会えていません。今年の夏にでも出会えないかと思っています。

写真でも見られますが、光沢のある葉の模様が魅力的で、変わった模様の株は珍重されるとのこと。また、この葉の模様が野鳥のうずらの羽根の模様に似るというのが、種名の由来です。

花期は８月～９月頃、小鳥が羽根を広げたような形の花を花茎の一方に偏って咲かせます。

希少種ゆえ、大切にしたい植物です。他府県では絶滅危惧種に指定されて保護されているところも出ています。